杉本苑子

影の系譜

豊臣家崩壊

杉本苑子

影の系譜

豊臣家崩壊

文藝春秋

影の系譜　豊臣家崩壊

昭和五十六年八月二十五日　第一刷
昭和五十七年二月　一　日　第六刷

定価　一二〇〇円

著者　杉本苑子
発行者　杉村友一
発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三
印刷　凸版印刷
製本　中島製本
万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Sonoko Sugimoto 1981　Printed in Japan

目
次

宿命の血　7
わが子ひとの子　42
浅井三姉妹　65
小田原留守陣　89
色は匂えど　111
味よしの瓜めされ候え　137

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

小今ガ淵 164
砂利 189
熊野牛王 214
本来、東西なし 240
夢のまた夢 266
あとがき 287

装幀　粟屋　充

影の系譜

豊臣家崩壊

宿命の血

荒々しい夕焼けを全身に浴びて、ともは佇っていた。白髪まじりの蓬髪が烈風に吹き乱され、それじたい、悪意を持つ別の生き物ででもあるかのように上半身に纏いつき顔を打つ。本来、旗を支えるために立てられた竿が、風を孕む布の力に翻弄されて、倒れかかろうとする危うさに似ている。

ともの、女にしては上背のあるがっしりと張った骨太な体軀は、五十四歳という年齢相応に肉が落ち、脂気を失って、あさぐろく乾きはじめてきたが、舞いもつれる髪に引きずり倒されるほど、まだ、しかし弱ってはいない。こころもち足を左右に踏んばり、風に抗って石垣の突端に立つその、うしろ背には、どのような心に沁む呼びかけにさえ揺らぐことのなさそうな拒絶の意志が、鋼鉄の板さながら張りつめていた。

声をかけかねて、小一郎秀長は足を止めた。ひき返そうかとも一瞬、迷った。

（しばらくこのまま、そっとしておいたほうがよいのではないか）

勁さを漲らせながら、じつはいま姉の内奥が、外見とはうらはらな悲しみと恐れに、まっ黒に塗りつぶされているのを秀長は知っている。ひと声の慰藉にすら崩れかねない気の弱りが、逆に懸命にともを支えて、骨ばった怒り肩をいっそういかつく見せているのだし、それは同様、血を分け合った肉親として、秀長自身もまた、共有しなければならぬ不安であり恐怖であった。

ともが見おろす石垣の下に、すでに一人も人はいない。小今の遺骸は片づけられ、可憐なその顔面を打ち砕いた石のかど、脳漿の飛び散った地面も清掃されて、惨劇の痕跡はもはやどこにも残ってはいないはずである。少女にはたったひとりの身寄りに当たる兄の幡利一郎は、一言の問い質しも口にせずに妹のむざんな屍体を引きとった。相長屋の者たちが手伝って、いまごろはささやかな葬いの用意がすすめられているにちがいない。

何かに急かされてでもいるようなあわただしさで、小今墜死の事実が覆われ、城中に住むだれかれの記憶から大いそぎで消し去られたとしても、それは無理な取りつくろいでしかなかった。ともは傷つき、少女がその、小さな身体から流した鮮血よりも、さらにおびただしい血の量に心をまみれさせた。きずは深く刻まれて、生きつづけるかぎりともを怯えさせ、苛み通すだろう。

「姉上」

たまらなくなって、小一郎秀長は呼びかけてしまった。そしてすぐ、悔いた。緩慢な動作でふり返ったともは、秀長の予想以上に深刻な打撃を、顔面にありありと刻りつけていた。それでなくてさえ老けて見える目鼻だちが、晩秋の冷気にそそけだって、いきなり五ツ六ツ、さらに年取ったかとさえ怪しまれた。落ちくぼんだ眼窩の底に、双の眸ばかりが異様に光って、能面の泥眼を思わせる。怕さよりも、むしろ言いようのない痛ましさに秀長の胸は緊めつけられた。

「えらい風ですな」

つとめてさりげなく彼は言った。

「お風邪を召すといけません。屋形へおもどりなされませぬか」

「うう」

のろのろととも は近寄って来た。二人のぐるりを囲うのは、そのまま本丸の敷地につづく雑木の疎林である。枝がざわめき、病葉が吹き散った。ともの姿は、碾茶色のひどく地味な打掛けのせいか、それじたい一枚の朽ち葉のようにも見える。

「八幡山城からの夕映えは、茜の照り返しが湖面を染めて華やかだが、そんな景色を見馴れているお目には野の拡がりばかりで、ここ、郡山の落日は退屈でしょう」

と、秀長が話題にした八幡山城は、近江の琵琶湖畔に位置する羽柴秀次の本城である。ともと、ともの夫の三好武蔵守吉房は、せがれ秀次と同居して現在、八幡山城に住んでいる。

聚楽第が完成し、

「見にこられよ姉者」

と、いま一人の弟藤吉郎秀吉にすすめられるまま、ともが居城を発ったのは四日前だった。まっすぐ入洛せずに、宇治川を南下して奈良へ出、末弟小一郎秀長を大和の郡山にまず、訪ねたのは、かねがね、

「聚楽第へまいられるさいは、同道いたしましょう」

と申し合せていたからである。

(せがれの秀保とも、逢いたい)

目的のなかばは、そこにもある。

三好吉房とのあいだに、ともは男の子を三人生んだ。長男が、ことし二十になる秀次、次男が実子のない秀吉の、養子に迎えられた十九歳の秀勝、三男は、これも女の子しか持たぬ小一郎秀長に請われて、叔父の家の跡取りとなった秀保だ。

ともが四十六のとき出産した子だから、秀保は二人の兄たちとは年がだいぶ離れている。今ようやく、九歳の少年にすぎない。ひさしぶりに母の顔を見て大よろこびし、双六の相手をしろの、新しく自分のものになった青毛の鞍置き馬を見ろのとはしゃいだあげく、興奮の余波であろうか、滞在二日目の今日になってとんでもない事件を引き起こした。召使の小今を石垣の上から突き落としたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

原因はとるにたらない。かがり鞠の取り合いから始まった口喧嘩だった。召使とはいっても、小今も秀保と同じ年の九ツだから、遊び友だちにひとしい。おたがいの駄々が昂じて、

「おのれ、よこせというに、よこさぬかその鞠……」

とうとう秀保が暴力沙汰に出た。小今に撲りかかったのだ。

「いやですッ、こんどはわたしがつく番ですもの」

強情を張って少女も鞠をはなそうとしない。秀保の拳をかいくぐって逃げ出した。

「待てッ」

みるみる秀保の顔から血のけがひいた。目がつりあがり、子供ながら、悪鬼にでも憑かれたかと思う猛々しい兇相となって、いきなり腰の脇差を抜いた。はじめのうち、狎れの余りの埒もないいさかいと取って笑いながら遠目に眺めていたともも、息子の顔つきのただならなさに、

「やめなされ秀保ッ」

仰天して座敷を走り出た。はだしで庭へとびおりるあとを、侍女たちまでが、

「若さま、ご短慮はなりませぬ」

くちぐちに叫びながら追い廻したが、秀保は耳をかそうともしなかった。悲鳴をあげて逃げ惑う小今を、石垣のきわに追いつめ、首すじめがけて一刀をふりおろした。刃先は届かなかった。少女はでも、足をふみはずし、三丈もの高さから転落して命を絶ったのである。

騒ぎを聞きつけて秀長が駆けつけ、見さかいなく叔父にまで斬ってかかる秀保を取り抑えて、ひとまず一室に押しこめた。小今の屍は、このまに家臣らの手で幡利一郎の家へ運ばれた。兄は十三——。これもまだ、小姓勤めがせいぜいな前髪であった。

ともの姿が見えなくなったのに気づいて、秀長が探しに出たのはこの直後だ。夕焼けの逆光の中にひとり、風に揉まれながら佇んでいるのを見て、当りさわりなく、湖水に臨む八幡山城の、落日のみごとさを秀長は口にしたのだが、ともははかばかしい応答を返さなかった。落葉降りしきる林の中は、はやくも暮れ色を濃くしはじめている。風が強いのに遠雲は動かず、茜は急速に輝きを失って、そのまま夜に移ろうとする空の気配だった。

「さ、もどりましょうか」

うながすのを、ともは聞き流して、

「小一郎どの」

呻くように呼びかけた。

「わたしは恐ろしい。今日の秀保めの、小今への仕打ちで、いよいよはっきりしたが……まぎれもなく我が家には、狂気の血が流れておる。のう、そうは思わぬか？」

秀長は足許に視線を落とした。檳榔の葉で編んだ緒太の草履の、爪先のなかばが埋まるほど林中の落葉は厚い。

「同じ疑念を、じつはとうから、わたしも心中に抱いてい

ました」
と、姉の目を見ずに秀長は言った。暗い、押し殺したような小声であった。
「では、こなたも前々から?」
「言い辛いことです。まして旭日昇天の勢いで天下取りへの大道を驀進しつつある兄者の耳に、一族間の血にかかわる忌まわしい疑いなどささやいたら、どれほどの不興をこうむるか……。お怒りのすさまじさを思いやると、つい気持が萎えて、これまで黙っていたのでした」
「その藤吉郎からして、わたしには健やかな精神の持ちぬしとは受けとれぬ。芯のどこかに蝕みのある樹——そう見てきた。小猿と呼ばれていた幼少のころから、陽気と陰気の差がいちじるしい子でな、先刻の秀保同様、カッと激すると手のつけられぬ暴れ方をしたものじゃ。継父の竹阿弥どのを困らせぬいたのを、小一郎どの、こなたも憶えておろう」
「さよう。まるで昨日のことのように……」
おもくるしく秀長はうなずいた。忘れようにも忘れられない。唯み合いが嵩じて家をとび出し、それっきり三年ほど、音信不通になってしまった藤吉郎秀吉なのだ。
(どこへ去んだのか兄さま)
当時、小竹と称していた秀長は、日に幾度となく戸口に立って、小猿の名をそっと呼んだものだ。ずいぶん泣かされもしたけれど、彼は兄が好きだった。家は貧しい。空腹にあと押しされての柿盗み栗盗みにも抜け目ない成果をあげ、追いかけられれば村人の怒号打擲から、時には楯になって弟をかばってもくれた小猿なのである。

出ていかれたあとの淋しさが、小竹にはこたえたが、いっぽう、家じゅうがほっとしたのもたしかであった。小猿の存在はつねにつねに、家族のあいだで悶着の種となった。争い合う相手はほとんどの場合、竹阿弥である。
織田家につかえて勝手もとに近い茶所に詰め、城内の将士らへの湯茶の給仕をおもな仕事にしていた竹阿弥は、女こどもでも間に合うそんな気軽な奉公にすら耐えられず、故郷の尾張中村にもどって寝たり起きたりの生活をつづけていた半病人だ。口やかましく、気むずかしい男だったとは、小一郎秀長も認める。しかし連れ子の遠慮も、病弱な日常へのいたわりもなく、ことごとに継父を挑発しくってかかって、しまいには喘息を生涯の宿痾にしていた竹阿弥が発作を起こし、胸をかきむしって苦しむのを、小気味よさそうに見ていた小猿の酷薄さ、意地の悪さ……。さすがにそこまでは許しがたかった。
加虐の快味——。
相貌が猿に似、動作もすばしこかったため小猿の愛称を名にしていながら、じつは兄が、性格的にはけっしてとぼけた小動物のそれとは類似していない事実を、小竹がいやというほど実感するのはこんなときである。継父の苦悶を

みつめる小猿の目の、冷ややかなかがやき、への字に曲げた唇のはしに、苦しめることを楽しんでいるかのように湛えられた薄ら笑い……。巧みな韜晦の、一枚下に隠された兄の本質が、ギラと表面に露出するのを見て、そのたびに小竹は背すじに悪寒を走らせた。

弱いものいじめは悪童のつねだ。いたずらにかけては人後に落ちなかった小猿が、無類の機敏さを発揮して年も図体もはるかに大きなガキ大将や、ときとすると大人とまで渡り合いながら喧嘩にひけを取らないのを、

「臆病者、それでもおれの弟か」

と番たび、嘲けられながらも小竹は、畏敬の思いで見ていた。強いあんちゃんが、この上ない拠り所であり誇りでもあったのである。

蛙の太股を裂き、くるりと生き皮を剝いて、

「うめえ」

ピクピク動く肉を食べたり、鳥けだものを罠で捕る、土竜を突つき出していじめ殺すといった性情は、土民の子ならだれもが持つ自然さであろう。春さきの田ンぼでトカゲの大きなのを鋤の刃にかけ、あやまって胴切りにしてしまったとたん、

「ひッ」

泥の中に腰をぬかした小竹の弱気のほうが、むしろ、その育ちからすれば場ちがいだったといえる。ただ、

「さあ喰え、おめえも……」

と、つきつけられる蛇や蛙の生肉を、どうしても口に入れることができず、餓えているくせに小竹が尻ごみするのを憎がって、

「喰えったら喰わねえか。ひとがせっかく捕ってやったのに……」

衿がみ掴んで押し倒し、馬乗りの乱暴さで所きらわず、ぎゅうぎゅう顔中になすりつけてくる兄の眼光の、執拗なゆらぎの中に、小竹はやはり、他の村童との相違を感じないわけにいかない。狂的な燃えを青く、冷たく、燐火さながら射かけている目なのである。

茶坊主あがりだけに竹阿弥は、文盲ぞろいの村人の中では四角い文字の拾い読みぐらい、どうやらできる男であった。継子の反抗に手こずりきりながらも、

「こいつ、馬鹿じゃあない」

学ばしたら、あるいは一カ寺の跡式をつげるぐらいの知識にはなるかもしれぬと踏んで、光明寺という寺に小猿を預けた。

叩き出されるようにそこから返されたのは、仲間の雛僧、喝食の少年らを苛めて、二人もの腕を折ったのが直接の原因だし、そのほかにも手のつけられぬ悪業をいやというほど演じたらしい。家から追い出された鬱屈を、寺での八ツ当りではらしたのだ。

本尊の御首をはめこみの胴体から引っこぬき、肥料溜めに投げ入れるといった所行には、もはや腕白のいたずらで

は片づけられぬ毒々しい悪意があった。日ごろ竹阿弥とはしたしかった和尚が、たまりかねて破門してまもなく、小猿はこんどは自身の意志で、親もとをとび出してしまったが、継父との、大衝突のもとになったのは隣家の犬だった。鶏小屋に忍びこんで卵を呑み、見つけられて小猿は主人になぐられた。それを恨んで、飼い犬が生んだ六匹もの仔を、六匹ことごとく踏み殺してのけたのである。母犬の乳房に吸いつく姿が可愛くて、毎日のように隣へ見に出かけていた小竹だから、眼球をとび出させ、鼻からも口からも血塊をほとばしらせて潰れている仔犬の亡骸を示されたときには、三晩もつづけて悪夢に襲われるほどおびえた。

「猿なものか。魔物じゃ、鬼じゃ」

竹阿弥は痩せひすばった肩を慄わせ、ぜいぜい咽喉を鳴らしながら、

「出ていけッ、やがては親のこのわしの寝首さえ掻きかねぬ童……。もうもう家には置けぬ。どこへなりと失しょう」

さけび立てた。

「おさらばするとも」

妙に静かな、落ちつき払った語気で小猿は応じた。

「そっちが嫌ならこっちも嫌なんだ。たのまれたってこんな家に、この上、居すわってなどいるもんか」

いつものあの、冷やっこい薄ら笑いを口もとにうかべたまま、ぷいと出てゆくうしろ影を追って、母親のなかが戸外へ走った。

「お待ち、猿ッ」

水屋の塩壺から掴みあげた汚ない布袋……。小猿の手にそれを握らせ、

「永楽銭だよ。一貫文ある。前のお父っつあんの弥右衛門さんが、形見に遺して逝った金だ。実の子のお前にやる分には竹阿弥どのも文句はいうまい。さあ、せめてこれを支えに、どこででも踏んばって生きておゆき」

口ばやにささやいた。

「ふん」

礼は言わなかった。でも、嬉しいことは嬉しかったのだろう、小猿は鼻めどをふくらませ、大急ぎで布袋をふところにねじこむと、

「おっ母ァ、達者でな」

その母の片わきになかば隠れて、こわごわ見送っている小竹の額を、

「あばよ」

指でこづいて去っていったのだが、

「ああ、やっとこれで、疫病神が退散したなあ」

気落ちから、かえって竹阿弥は死期をはやめ、まもなく他界してしまった。

出奔したとき小猿は十五、小竹は十一――。その下の妹のきいは九ツ、総領のともは十八歳になっていた。継父に

死に別れたあくる年、ともは光明寺の下僕だった弥介という若者を婿に迎えたのだから、村の娘たちの中では晩婚といえる。

寺にいたころ和尚に読み書きの手ほどきを受けて、弥介はめずらしい本好きだった。ともと祝言すればその日から、わずかな畠地にしがみついてくらす百姓の仲間入りだが、野良への行き帰りにも和尚から借りた仏典など懐中し、飯どきの畦で読みふけった。貧弱な光明寺の蔵書など、やがて一冊のこらず読了してしまった気質を、かねがね竹阿弥にも見こまれて、その生前から、

「ともものつれあいに、ぜひ……」

と和尚に約束してあった。これが現在の三好武蔵守吉房である。

夫婦仲はむつまじく、子供もつぎつぎに三人生まれた。孫七郎秀次、小吉秀勝、三吉秀保……。彼らはいま、それぞれに身分を保証され、他目には倖せな、言うことなしの若殿ぐらしを享楽している。

そしてそれは、並はずれた小猿の才覚、努力と運とその出世とに、おぶさって齎された夢のような変転であった。

でも、ともにしろ弥介にしろ、小竹やきいにしてからが、よろこびと同量の苦痛を、じつはひそかに、噛みしめつづけてきた歳月なのだ。貧しいなりに平穏ではあった尾張中村での百姓ぐらし……。それに終止符が打たれたのは、

「母者、姉者、来い。小竹やきいも、もうこんりんざい、ひもじい目にはあわせぬぞ」

木下藤吉郎と名を替えた小猿の、りっぱに屋敷と呼んでよい門構えの住居に、一家をあげて引き取られたときだった。

竹阿弥の歿後、いったん帰郷した小猿はすぐまた、村をはなれ、清洲の城主織田信長に仕えて草履取りとなった。最下底から踏み出した第一歩だが、小人頭、足軽組頭と順調に昇進してゆき、故郷の家族をよび寄せたときには、すでに織田家中のお弓衆浅野又右衛門の養い娘を妻に迎え、美濃攻めに功をあげて、もういっぱし属将の一人になりあがっていたのだ。

権勢への急坂をまっしぐらに登りはじめたそれからの、藤吉郎秀吉……。息せき切る思いで背後に従いながら、親きょうだいが舐めつくしたのは、じつのところ衣食の栄華とはおよそかけ離れた地獄の実態だったのである。

小一郎秀長の自覚の中に、その思いはことに深かった。姉婿の弥介——三好吉房の本心も、

(おそらく自分と、大差あるまい)

そう秀長は推量している。

小竹と呼ばれていたころから繊細だった秀長の神経は、武人として生きねばならぬ運命の到来に、おののき、竦んだ。

生まれてはじめて彼が、重い甲冑を身につけ、戦場という名の修羅場へ出たのは、稲葉山城に斎藤勢を攻めたとき

だった。

馬の乗りよう槍の持ちようぐらいは、弥介ともども兄の藤吉郎に教えられて、どうやらこなせるようになりはしたものの、それも二人ながら、かろうじて落馬しなくなったという程度で、いざ実戦に臨むとたちまち槍はからめ取られ、夢中で引きぬいた陣太刀までどこかで失って、鞍の前輪にしがみついているだけの醜態となった。

「おたがいに百姓あがりだ。初手はおれだってビクつき通したぜ。なにせ足軽からの振り出しだものな。お前らなどまだ、のっけに騎馬武者なだけましなのだ。何でもいいから手の得物をふり廻し、固く両眼をつむって敵中を駆けぬけろ。ぬけ出したらまた、馬首をめぐらして叫喚の渦に突っこむ。それをくり返しているうちに戦いのほうでいつのまにか終ってくれる。馬まかせさ。駆けぬけ駆けぬけしているだけでいいんだよ」

事もなげに藤吉郎は言うが、小一郎や弥介にすれば、敵にしろ味方にしろ斬り合いの騒擾の中にいる武士なる男どもは、じたい人間とは思えなかった。血に餓えた化生の者であり悪鬼羅刹であった。叩き落とされて吹っとぶ腕、はぜる血肉、ころがる生首……。何度も何度も小一郎は馬上で失神しかけ、苦い胃液をげえげえ吐いた。落馬をまぬがれたのは、あらかじめ兄が、鐙と足を革紐でしっかりくくりつけてくれておいたのと、

（落ちたら最期だ。膾のように、わたしもやつらに斬り刻まれてしまう）

必死におのれを励ました結果である。

あとで聞くと弥介は、なまじ革紐が仇になって、あぶなく窮地に陥りかけたのだそうだ。片方がほどけたため仰向けに鞍からすべり落ち、片足を鐙にのせたまま奔馬のあがきに曳きずられてしまったのだという。この不様を、敵が見のがすはずはない。どっとむらがって来かけたのを、切先そろえて防いだのは、これも藤吉郎が附けておいてくれた手下の雑兵連中だ。おかげでからくも一命を拾いはしたが、殘れた敵の一人の太股の、ざっくり割りつけられたきず口がまくれ上り、黄色い脂肪層のあいだから生乾きの血がどろりと青光りして流れ出したのを見た瞬間、髪の根がぞっと逆立ち、小一郎同様こらえようもなく弥介もやはり嘔吐して、それっきり死骸のまっただ中に昏倒してしまった。

「のう、小一郎さん、戦場稼ぎというやつは、どうにもわしらの性には合わぬなあ」

「このさき一生、あれを続けてゆくのかと思うと生きるそらはありませぬなあ」

「弱ったのう」

彼らは彼ら自身の手で、不適格者の烙印をみずからの額に押さなければならなかったけれど、斬り口に血泥をこびりつかせ、目くちをカッとはだけた見るもおぞましい生首が、将兵たちには一個一個、恩賞につながり勝利の美酒に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.